

Title	インドネシア語の論理と心理について
Author(s)	松浦, 健二
Citation	大阪外国語大学学報. 14 p.107-p.124
Issue Date	1963-12-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80229
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

インドネシア語の論理と心理について

松 浦 健 二

Tentang Logika dan Djiwa Bahasa Indonesia

MATSUURA, Kenji

Pendahuluan

Adalah suatu kenyataan, bahwa bahasa itu dipandang sebagai barang yang hidup dan mengalami perkembangan sedjadar dengan kemadjuan penghidupan manusia dan perdjalanannya sedjarah. Bahasa Indonesia yang bersendikan bahasa Melaju telah mengalami kemadjuan yang pesat dan sedang dalam pertumbuhan yang sehat kearah bahasa yang lebih sempurna.

Kemadjuan bahasa Indonesia yang tersebut tidak luput dari pengaruh dunia luar, artinja sedjak zaman Pudjangga Baru faktor-faktor bahasa Eropah diambil kedalam bahasa Indonesia sebagai alat untuk mengisi kekurangan yang terasa benar oleh kaum tjerdik pandai Indonesia.

Akan tetapi menilik irama dan gaja bahasa Indonesia pada dewasa ini, kiranja dapat disimpulkan, bahwa pengaruh dunia luar yang dialami bahasa Indonesia itu hanja bersifat kulit sadja, artinja inti sari bahasa Melaju tetap dipertahankan dalam bahasa Indonesia.

Inti sari bahasa Melaju yang masih hidup sehidup-hidupnja didalam bahasa Indonesia menarik perhatian saja, karena ini mentjerminkan djiwa bangsa Indonesia yang berpangkal pada tradisi yang telah turun temurun, yang tetap tidak berubah sesudah dialami perubahan dan pergeseran zaman.

Perhatian saja terhadap hal jtsb. mendorong saja memilih pokok risalah ketjil ini sebagai pertjobaan untuk menegaskan sifat bahasa Indonesia.

ま え が き

今日、インドネシア語が、画期的な発展期にあるとはいえ、マレー語を母体とするインドネシア語が、今日もなお、旧来のマレー語的な慣用句に依存する表現形式を多分に備えていることは、否定できない。Pudjangga Baru 時代から、思想と表現の因果関係に立脚して、旧来のマレー語的な「固定的」表現形式にあきたらずに、積極的な摂取活動によって多くの西洋語的要素が導入されたが、現代インドネシア語の底流をなすものは、マレー語的なリズム、スタイルではなからうか。これは時代的な推移を経た後においても、伝統の深層に根をおろすインドネシア民族の典型的な特性を反映するという意味において、十分な興味を唆るのである。

社会性をもつ言語に論理的な表現が要求されるのは当然であるが、反面、論理的でないと思われる表現が、それを母国語とする民衆の心理的要素、民族的思考のパターンを反映したものである場合も少なくない。このような観点から、表記のテーマに基づいて、様相を可能なかぎり明確にするための一つの試論として、拙稿をまとめてみた。なお、問題の性格から、実証的にインドネシア語の本質に即して、個々の指摘を裏づける材料として例を示した。

— 1 —

外来要素を導入する以前のインドネシア語は、インドネシア人の感覚・心理に密着した伝統的なマレー語に根ざす慣用的な表現が多く、また、インドネシアの文学作品に、自然描写、人物描写、心理描写が豊富であることで示されているように、インドネシア人の感性、心理は十分に表現できるが、観念や思想を表現するには不向であった。すなわち、言語が、論理にたえられなかったのである。しかし、外来要素の摂取が、従来のインドネシア語の「固定的構造」に柔軟性を与え、インドネシア語による論理的表現へ道を開いたことは否定できない。

今日見られるインドネシア語による学術書や評論の文章、また、新聞の文章などのマスコミュニケーションに用いられるインドネシア語は、西洋語的な論理が多く導入されているため、表現が科学的であって、文の成分の省略が殆どなく、語の配置が比較的固定した屈折の少い格調のあるものが多い。これは、従来、含蓄のある表現が多く見られたインドネシア語の文章と比較すると、まさに大きな変革であって、自らの思想や観念を、科学的、論理的に表現しなければ、表現内容そのものに論理性が失われるという意味において、インドネシア語が、画期的な発展を遂げたと言える。

しかしながら、一国の言語には、その国の国民の心理に密着した言葉の心理があり、外来要素

によって変えられない国語の本質がある。インドネシア語が、論理的表現の可能な言語に脱皮したとしても、それは、皮相的なものであって、インドネシア語の本質、すなわち、マレー語の源泉は、あくまで維持されているのである。

インドネシア語の本質として指摘できることは、それが、在来の構文論で、機械的に説明のつかない夥しい慣用表現をもち、実際の規則というよりは、むしろ慣用語法に依存しているということである。それが、一面では、インドネシア民衆の心理を反映しているという見方もなり立つが、他面、言語そのものの論理性が要求される論理的な文章において、非科学的な、誤解をまねく表現となって現われるのである。

例えば、インドネシア語においては、形容詞的修飾語は、被修飾語のあとに置かれるという文法上の約束があるが、〈soal masyarakat jang baru〉という句において、〈「新しい社会」の問題〉を意味するのか、〈社会の「新しい問題」〉を意味するのか、判然としない。同様に、〈djiwa agama jang kolot〉という句において、〈「古い宗教」の精神〉を意味するのか、あるいは、〈宗教の「古い精神」〉を意味するのか曖昧である。これらの修飾語・被修飾語の関係は、「コンテキスト」によって、直観的に理解できる場合もあるけれども、そうでない場合の方が、むしろ多い。このような表現上の不合理性・曖昧性を、インドネシア語における一つの非論理的な側面として指摘する必要があるだろう。すなわち、インドネシア語においては、名詞が重複される場合、後置される名詞は、前置される名詞を修飾して形容詞としての機能をもつが、さらに、修飾語としての形容詞が後に置かれる場合には、前置される名詞のいずれを修飾するかについて、文法的な約束はない。

もちろん、このようなインドネシア語の配置法から生ずる文意の曖昧性が、絶望的にカバーできないと言うのではない。このような点に敏感なインドネシアの文章家の間では、〈soal kemasjarakatan jang baru〉、〈djiwa keagamaan jang kolot〉の如く、〈baru〉および〈kolot〉が、〈soal〉および〈djiwa〉を修飾するということを明確にする場合、後置される名詞に、接頭辞 ke-, 接尾辞 -an を付加して、注意深く誤解を避ける配慮がなされている。この〈ke~an〉を付加して上述のような誤解を避ける傾向は、最近のインドネシア語に見られるのであるが、これが、規則的に適用されていない、すなわち、画一的なルールで処理されていないところに問題がある。〈Bunga isterinja jang tjantik〉という句において、〈「美しい彼の妻」の花〉を意味するのか、〈彼の妻の「美しい花」〉を意味するのか明確でなく、さらに〈rumah penduduk jang sederhana〉は、〈「平凡な住民」の家〉を意味するのか、〈住民の「質素な家」〉を意味するのか明確でない。L.O.Malim の作品 Kemudikan の中に、〈Seorang bekas rakjat

ajahku jang budiman memintaku tinggal dengan pertjuma dirumahnja di Makassar.〉という文章があるが、〈budiman〉が、〈bekas rakjat〉を修飾するのか、〈ajahku〉を修飾するのか不鮮明である。これらについて見た場合、〈isterinja〉〈penduduk〉〈ajahku〉は、それぞれに、既に「アフィックス」が付加されているので、上述のような、接辞上の配慮によって、被修飾語を限定することは不可能であろう。もっとも、最近のインドネシア語において、二重接辞とも言うべき〈dimengerti〉〈diberangkatkan〉のような形態が現われているので、将来のインドネシア語の課題としての接辞機能の拡大によって、このような表現上の曖昧性がカバーされるかも知れない。

上述のような非論理性は、もちろん、論理的な文章にのみ現われる現象ではなくて、インドネシア語のあらゆるジャンルの文章を覆う短所として把握しなければならないと思う。

さらに、先に述べたように、インドネシア語において、意味の異なる名詞が重複される場合、後置される名詞が、前置される名詞を修飾して形容詞的な機能をもつという文法上の約束があるが、これが、意味の上で曖昧さを露呈することが稀ではない。例えば、〈tas sekolah〉は、〈学生カバン〉を意味する場合と、〈学校のカバン〉を意味する場合とがある。さらに、〈mesra ibu itu〉は、〈その母の愛情〉を意味する場合と、〈その母性愛〉を意味する場合とがある。Armjin Paneの作品、Kisah antara manusia において、〈kertas gambar〉が、〈画用紙〉の意味に用いられているが、〈kertas gambar〉は、〈絵のかいてある紙〉ともとれる。これは、〈kitab gambar〉が、一般に〈絵本〉という意味に用いられていることから、そのような解釈もできるのである。

— 2 —

上述のようなインドネシア語のあらゆるジャンルの文章を覆う非論理性はともかくとして、インドネシア語の論理的な文章と心理的、あるいは、情緒的な文章とを比較すると、後者の方が、理解に困難を伴う面が多いが、これを、内容から、後者の文章が、微妙な心理や捕捉しがたい感覚と意識の世界を表現している、いわば、感情の論理を扱っているため、その意味の把握が困難であるという普遍的な見方ができるが、「ことば」の面に焦点を置いて、その原因を求めてみると、伝達を目的とする前者の文章においては、文法と論理に基づいた格調のある文体が多いのに対し、作者が、伝達上読者より優位にたつ後者の文章においては(1)インドネシア語の短所の一つである品詞の不明確をカバーする努力があまりなされていない。(2)文の成分の省略が多い。(3)語の位置が、固定性を欠いて、flexible になっている。この3点に要約することができるであろう。もちろん、これらは、作者あるいは表現者の心理的基礎に基づくものであって、個人によって、

固有の傾向を示すのは言うまでもない。

しかし、わたしは、この3点をもってインドネシア語の心理的、あるいは情緒的な文章そのものが、論理性を欠いているとみるのは、妥当でないと思う。(1)の「品詞の不明確」についてみても、文章の他の成分に対する配慮によって、文意の曖昧がカバーされ得るのである。例えば、Pramoedya Ananta Toerの作品、Tjerita dari Bloraの中に、〈Masing-masing punja pemasukan dan pengeluarannya.〉という文章があるが、〈punja〉は、所有を表わす助詞「の」を意味する場合と、動詞「もつ」を意味する場合とがある。末尾に人称代名詞三人称の所有格 -nja がなければ、〈各人の収入と支出〉という意味にもとれるし、〈各人には、収入と支出がある〉とも解釈できる。實際上、末尾の -nja は、文法上不可欠のものではないので、品詞の不明確から生ずる文意の曖昧が、文の他の成分に対する配慮でカバーされているのである。つまり、言語が社会性をもつという意味において、-nja が脱落した場合に生ずる理解不全を Pramoedya Ananta Toer の無意識の配慮が、それを救っていると考えられるのである。

(2)の「文の成分の省略」にしても、読む方で、context から直観的に一致した補充が可能な場合、あるいは会話においては、situation が、直観的に形成理解されている場合の省略、すなわち、意味の上から、それを欠いても、不都合でない場合、表出しないで、表現を簡略化するのであるから、非論理的であるとは言えない。むしろ、感情のほとばしるままになされる省略によって、含蓄のある効果的な表現になっている場合が多い。この点を明確にするためには、多くの例を必要とするが、以下、品詞から、また、文の要素から、任意の引例によって、省略の比較的多いものを挙げる。

(A) 品詞による分類

名 詞

Kami bukan (orang) dari golongan priaji. (Pramoedya Ananta Toer - Tjerita dari Blora)

代名詞

Kami makan itu disebuah restoran, (jang) biasa didatangi orang sematjam kami dan sematjam kedua laki-laki itu. (Armijn Pane - Kisah antara manusia)

形容詞

Demamnja jang dibawanja dari Mekah bertambah mendjadi (tinggi). (HAMKA-
Dibawah lindungan kaabah)
Kami suka jang pedas, tapi djangan terlalu (pedas). (Armijn Pane - Kisah antara manusia)

副 詞

(Dari tempat) tiada djauh terdengar gelombang memetjah. (Armijn Pane - Kisah

antara manusia)

前置詞

Ketika kereta api masuk (ke)setasiun sore itu…… (A.K. Mihardja - Atheis)
(Pada) tanggal 2 saja sudah sampai di Bandung.

接續詞

Bajangannja tampak mengindahkan wadjah lautan jang tenang (dan) tak berombak.
(HAMKA - Tenggelamnja kapal van der Wijck)
Apa sebabnja teknik dan pengetahuan lahir (dan) berkembang di Barat……
(Zuber Usman - Kesusasteraan baru Indonesia)
(Setelah) letih menangkap ikan disuruh mereka rapatkan perahu ketepi……
(S.T. Alisjahbana-Lajar Berkembang)

Kainnja sempit menjelubungi badannja dari kakinja sampai keatas dadanja, (dan)
diikat keras oleh stagen dibagin atas…… (Armijn Pane - Kisah antara manusia)

動詞

Dia sudah (mendjadi) perawan sekarang. (Pramoedya Ananta Toer - Tjerita dari Blora)
Waktu aku (ada) dalam kesulitan itu, aku sedang dikapal "Reaal" dalam pelajaran.
(L.O. Malim - Kemudikan)

Besok aku akan (pergi) ke Tjirebon untuk bersua dengan ibu-bapaku.
Semua jang hadir tak dapat (menjebut) apa jang akan discbutnja pada waktu itu.
(HAMKA - Didalam lembah kehidupan)

Isteriku dan teman suami isteriku itu sudah ber-agak2 hendak pulang, tapi kuberi
isjarat, djangan (pulang) dulu. (Armijn Pane - Kisah antara manusia)

Barang-barang orang lain telah dikembalikan, tetapi barangnja belum lagi (dikembalikan).
(HAMKA - Didalam lembah kehidupan)

Apakah perlunja aku katakan dimana aku (ada) sekarang. (Armijn Pane - Kisah
antara manusia)

助動詞

Besok ia (akan) berangkat ke Padang Pandjang.
Suaranja (sudah) mendjadi keras dan ganas. (Pramoedya Ananta Toer - Tjerita dari
Blora)

(B) 文の要素による分類

主語

(Tuan) lupa lagi? Masa (tuan) lupa? Tjoba (tuan) ingat-ingat!
Ah, tentu sadja aku tidak lupa! Masa (aku) lupa! (A.K. Mihardja - Atheis)

述語

Siapa jang datang terdahulu pagi tadi?
Amin (datang terdahulu pagi tadi).

主語と述語

Kapan tuan pulang ke Indonesia?
Besok (saja) pulang ke Indonesia).

以上は、インドネシア語に見られる数多い省略の一部にすぎないが、これらは、作者、あるいは表現者が、インドネシア語の発想法と思考様式に基づいて、無意識のうちに省略が行われるものであり、主体的補充が、普遍的に、読者、あるいは聞き手に可能な場合であって、意味の上から、これらを欠いても不合理ではないので、これらの省略が、論理性を欠いているとは言えない。

(3)の語の位置が、直線的でなく、固定性を欠いていることについては、文意の不明確、理解の困難など、消極的な面をもつのであるが、語の配置法の屈折が、慎重に利用されると、インドネシア語独自の技巧として、微妙なニュアンスを出すことができる。この点については、インドネシア語の心理的な側面として把握する必要があるので、後述するとして、上に述べたように、品詞の不明確が、文章の他の成分に対する配慮でカバーされるということと、省略形についても、「コンテキスト」から一致した補充が受取る方に可能な場合の省略が殆どであるので、必ずしも非論理的であるとは言えない。むしろ、省略によって、余韻と含蓄をもった表現となって現われる場合が多いのである。

また、インドネシア語における非論理性として、しばしば指摘される時制組織の曖昧性の問題にしても、「現在進行時制」「未来時制」「過去時制」に見られる如き形態的特性は、「現在完了時制」「未来完了時制」「過去完了時制」には存在しないが、時を暗示する副詞を置くことによって、あるいは「コンテキスト」から、これらの時制が明確にされ得るのである。

現在完了時制

Ia sudah dua bulan berbaring ditempat tidur karena sakit.

Pernahkah tuan pergi ke Bali?

未来完了時制

Apa pula jang akan dikatakan oleh tunanganmu, jang tiada lama lagi sudahlah djadi suamimu.

Nanti pada hari ulang tahunmu kamu sudah bersekolah.

過去完了時制

Ia sudah berangkat kesekolahnja waktu saja mengundjungi rumahnja.

Waktu itu ia berusia tiga puluh lima tahun dan sudah lima tahun bekerdja diperusahaan itu.

上述の現在完了、未来完了、過去完了の各時制についての例文において示されているように、一様に過去を現わす助動詞〈sudah〉が用いられている。これらの完了時制は、言語表現の文法

形式としては、存在しないが、副詞の助けをかり、また文の脈絡に依存して、時制の曖昧がカバーされ得るのである。

西洋語的な文法基準に則ってインドネシア語を考察した場合、インドネシア語は、非論理的な面を多くもっているかも知れないが、英語には英語としての論理があるように、インドネシア語にも、インドネシア語としての論理がある。しかし、sentence というものは、主語、述語などの文の成分は必須不可欠の要素であり、語の配置について、過度の flexibility を認めない論理派の立場からするならば、インドネシア語は、文の成分を欠くことが多く、語の固定性から言うと、かなり柔軟性があるので、「ことば」の論理に欠けていると言えるかも知れないが、それを、わたしは、言語の一般の原則から離れて、インドネシア語における心理的な側面としてとらえなければならぬと思う。つまり、西洋語的な論理から言えばインドネシア語は、論理的に緻密さを欠く非科学的な言語であると言えるかも知れないが、反面、心理的には正しい表現をとっている場合が、むしろ多いのである。一国の言語は、論理的な側面とともに、固有の国民性と不可分の心理的な側面を備えている。インドネシア語文法が、西洋語の文法体系の中で処理されている現状において、西洋語の文法範疇で処理できない多くの心理的な側面をもっているのは当然であろう。

— 3 —

言語の心理が最も端的に現われるのは、強意表現においてであろう。インドネシア語における強意の対象となる語は、實際上、形容詞、副詞の如く、意味の強さの度合の比較を許す品詞が多いのは言うまでもないが、名詞、代名詞、動詞などが、強意接尾辞 *-lah* が付加されることによって、また、倒序法によって強調される場合も多い。

名詞

Kasih^{an}*lah* tambah kepada dia. (HAMKA - Didalam lembah kehidupan)

Sepeninggal saja, dia^{lah} wakil saja.

動詞

Timbu^l*lah* matahari dengan perlahan.

Mendjalar^l*ah* diseluruh badannja perasaan berbahagia melihat binatang2 jang ketjil.

(S.T. Alisjahbana - Lajar Terkembang)

(この場合、正序法による語の配置は、〈Perasaan berbahagia mendjalar diseluruh badannja melihat binatang2 jang ketjil.〉であるが、述語動詞を最も prominent な部分としたため、文の冒頭に置き、さらに、感覚の流動するままに、seluruh badan を次に prominent な部分とし、感覚の波が打寄せるように、

固定性を欠いた配語法をとっている。)

形容詞を強調する場合には、(1)強調副詞を用いる、(2)形容詞を重複する、(3)倒序法を用いて、形容詞を文の冒頭に置く、(4)形容詞に接尾辞 *-lah* を付加する、この4つの方法があるが、形容詞を重複した場合と、形容詞に強調副詞をあわせて用いた場合との間の強勢の度合の相違は明確でない。例えば④< Buku itu mahal-mahal. >と⑤< Buku itu mahal sekali. >との間における強勢の程度の差は曖昧であり、さらに、例序強勢法を用いた③< Mahal buku itu. >と強勢を現わす接尾辞 *-lah* を付加した⑥< Mahallah buku itu. >との間における強勢の度合の相違は、明確であるが、すなわち、④⑤③⑥の中で、⑥は③よりも強勢の度合が強いが、④⑤③、および④⑥⑤を比較した場合、強勢の度合の比較を示す絶対的な理論的根拠がないため、一定の基準を設定することはできない。これは、言語活動における主観性の問題として把握しなければならないのであって、同じ形容詞を強調する場合でも、話者、あるいは作者の心的態度によって、さまざまな言語的形式によって表現されるのである。すなわち、表現者が、自己の心理的、精神的作用に基づいて、主観的な表現形式を用いるのである。このような点において、言語をすべて論理でわりきることができない一面があるのであろう。

以下、一国の言語の心理的特性を把握する強意表現法が、インドネシア語において、どのような形で現われているか、具体的に考察する。

(1)会話では、強調する部分に強い *stress* が置かれる。文章では、*tanda seru* (!) が置かれる。もちろん、これは、単に表現上の補助手段として用いられているだけではなく、強調の表現手段として、文字で表現される以上に効果的な機能をもつのである。

Itu tidak saja bantah, apa boleh buat! (HAMA-Tenggelamnya kapal van der Wijck)

Dr. Sutomo mengandjurkan tjara pondok (tjara pesantren atau tjara surau di Minangkabau, penulis!). (Zuber Usman - Kesusasteraan Baru Indonesia)

(2)倒序法を用いる。これが、インドネシア語において、頻繁に用いられるという事実から、インドネシア語は、屈折の多い言語だと言うことができるであろう。もちろん、言語は、思想、感情の流れるままに表現されるわけであるから、如何なる言語においても、正序法のみをとるということとはあり得ず、弾力性のある位置づけがなされるのは言うまでもないが、インドネシア語の場合、初学者を戸惑わせるほど語の位置が、極めて *flexibility* に富んでいる。これは、一面からすれば、インドネシア民族の国民性として、感情過程を重視する民族だという見方がなりたつと同時に、この配語法に屈折が多いということは、インドネシア国民の心の流動と、意識の流れを言葉に表現する場合の言語的フラストレーションをやわらげる一つの側面となっていることも否

定できないであろう。

- ㊤ 目的語を文の冒頭におく。その場合、通常、助動詞は、目的語のあとにおかれる。

Surat itu sudah saja terima.

Djalan itu akan saja tempuh.

- ㊦ 動詞の目的語を強める場合には、その位置をかえる他に、passive constructionを用いる。

Barang jang djatuh itupun segera dipungutnja dari tanah, lalu ditaruhnja diatas bukunja.

(St. Iskandar - Tjinta dan kewadajiban)

(これは< Segera ia memungut barang jang djatuh itu dari tanah, lalu ia menaruh diatas bukunja. >と意味上は、かわりないが、目的語に mental stress が置かれ、それを主語にして、強調を現わす接尾辞 -pun を付加しているのであるから、この2つの文章の間には、心理的作用や、意識の流れにおける差異は明確である。)

- ㊧ 強められる部分を、代名詞の目的格や所有格で受ける。

Perempuan jang djahat itu, djangan tuan membiarkannja dalam keadaan begitu.

Djangan kita berlagak mau internasional, kalau *ingus kita sendiri*, kita belum sanggup mengurusnja. (Armijn Pane - Kisah antara manusia)

Anak jang masuk kekamar itu,apa tuan tahu namanja?

- ㊨ 主部と述部の転倒によって、述部に prominencyをおく。

Saja menangis ter-sedu2, karena *tidak tahan hati saja*. (HAMKA - Tenggelamnja kapal van der Wijck)

Takdjublah Jusuf dan Sukarto melihat mereka mengajuhkan sampan itu.

(S.T. Alisjahbana - Lajar Terkembang)

- ㊩ jang を用いて、主語に強勢をおく。この場合、主語に強勢接尾辞 -lah を伴う。

Kelak djika ia telah besar, *Kamilah jang* akan meneruskan hidupnja menurut tjita2 ibunja. (HAMKA - Didalam lembah kehidupan)

Itulah jang di-tjita2-kannja.

- ㊪ sadja を用いて、前置される語を強める。

Dingn *sadja* penerimaannja terhadap kedatangan kami.

Besok *sadja* kita kerdjakan.

- ㊫ 主語を強める場合、-pun を付加する。この場合、述語動詞に -lah が付加されることがある。

Karena matahari telah tjondong kebarat, kami pulanglah kerumah masing-masing.

Dalam pada itu hudjan turun bagai ditjurahan dari langit. (N.St. Iskandar - Naraka Dunia)

- ㊬ 数詞による強意的表現

Beribu-ribu maaf saja harapkan dari tuan.

Maaf, *seribu* maaf saja harapkan, berhubung saja tidak dapat turut menghadiri pertemuan itu.

① 類義語をdanで接続するか、接続詞を用いないで、そのまま重ねる。

rukun dan damai, aman dan sentosa, tjerlang tjemerlang, gilang gemilang, sunji senjap, gelap gulita, terang benderang, gegap gempita など。

— 4 —

以上は、強意的表現の中で、文の構成要素である語句、および語の一部の強勢、ならびに、語の配置法の屈折による強勢であるが、これらの強勢法は、意味の上で、重要な機能をもつのであるから、たとえ、文中において視覚的効果をねらった表示法が、とられていなくても、文章リズムの上からも、強勢を置いた発音がなされるのは当然であろう。

さらに、強勢法が、その国語の心理を表現するという意味において、強意的比喩を問題にしなければならないと思う。例えば、日本語で「鬼のような心」とか、英語で、〈as clear as crystal〉というような比喩があるが、これらは、「極めてキツイ心」、「非常に澄んだ」状態を現わす比喩であって、やはり、強意的表現の一つであると考えなければならないと思う。特に、強意的比喩は、その国語の、また国民の心理的投影として現われている場合が多いと思われるので、国民性や国民の社会的習慣や風俗を知る上での貴重な素材となると考えられる上に、比喩を用いた強意表現によって、我々は、その国民のインタルエストの対象が理解できるという意味において重要であろう。

Hatiku terang menerima katamu, *bagai bintang memasang lilinnja*. (私の心は星のきらめきのように、おまえの言葉を明るく受け入れる)

Kalbuku terbuka menunggu kasihmu, *bagai sedap-malam menjirak kelopak*. (私の心は、白百合が夢をひろげるように、おまえの愛を待ちうけている)

Tulangiga dan tulang dadanja menondjol-nondjol *selajak gambang*. (彼の肋骨や胸骨は、シロフオンのように突出している)

Dingin *bagai hidung kutjing*. (猫の鼻のように冷い)

Ia girang *seperti kuda lepas dari pautan*. (彼は、杭から放された馬のように喜んでいる)

Suaranja *seperti bunji gung petjah*. (彼の声は、毀れたドラの音のようである)

Matanja *seperti bintang Timur*. (彼女の眼は、暁の明星のようである)

Ia tersenyum simpul *sebagai pagi tjerlang tjemerlang*. (彼女は、明るい朝のように微笑している)

インドネシア語の比喩は、*bagai*, *sebagai*, *seperti*, *selajak*, *umpama*, *laksana* などの接続詞を用い、多くは、天象、動植物、楽器などを素材にしたものである。上述の〈*girang seperti kuda lepas dari pautan*〉は、〈*girang sekali*〉であり、〈*Suaranja seperti bunji gung petjah*.〉は、〈*Suaranja kasar sekali*.〉であるが、強調副詞を用いた直接的な表現よりも、修辞法上の技巧としての比喩を用いた表現の方が、より強い印象を与えるという意味において、効果的である。比喩を用いた強意的表現形式の中に、インドネシア国民の関心の対象がうかがわれるのであり、それが、インドネシア国民の民族性を反映している場合が少なくないとともに、インドネシア語において、直接的な表現よりも、比喩を用いた間接的な表現を用いた方が、言語の表現形式としては、より高度であると見做されている事実は、インドネシアの国民性を示唆するものがある。

— 5 —

さらに、インドネシア語の心理を問題にする場合、これに関連して、インドネシア人の「長幼観」を無視することは、できないであろう。すなわち、「兄弟姉妹」という場合には、英語では、*brother*, *sister* の如く、男女によって区別されているのに対して、インドネシア語においては、*kakak*, *adik* の如く、長幼によって区別されている。インドネシア語において、人称代名詞の三人称 *ia*, *dia* にジェンダーを欠いている事実とともに、一般的「知覚」とは別に、言語の上では、男女に対する「インタルエスト」が、比較的薄い事を示すのであるが、この長幼による区別は、インドネシア語に現われた心理的特性として、把握するのが妥当であろう。すなわち、インドネシア語では、「長幼観」に大きなインタルエストが置かれているということである。これは、広い意味におけるインドネシア語の敬語法とも関連してくるのである。

厳密な意味において、インドネシア語には、敬語法は、存在しないが、上に述べたインドネシア民族の「長幼観」に対する関心を基底として、人称代名詞が、極めて複雑である。*kakak* は、年少の相手に対する場合、一人称として用いられると同時に、年少のものが、年長のものに対して、二人称としても用いられる。逆に、*adik* は、年少のものが年長の相手に対する場合、一人称として用いられると同時に、年長のものが、年少のものに対して二人称としても用いられる。つまり、長幼関係を重視するということが、インドネシア語の心理的特性として現われているのである。これと併行して、インドネシアの封建的、階級的社会の名残として、身分関係を現わす

人称代名詞が、極めて複雑であり、会話において、「いやしめ」「卑屈」「事大主義」「形式主義」の傾向を帯びるのである。特に、二人称として用いられる *tuan*, *engku*, *saudara*, *kamu*, *engkau* などの間には、それを用いるものの心の雰囲気が見われ、会話そのものに、「尊敬」「丁寧」「いやしめ」のムードをつくるのである。すなわち、人称代名詞の一人称、二人称が、心理的に選択されるということである。また、初対面であると想像していた相手が、旧知の関係であることが分ると、仲間意識から、用いられる人称代名詞が変わってくるということが生ずる。つまり、心理的な親疎関係に基づいて、人称代名詞が選ばれるのである。例えば、Achidiat K. Mihardja の作品、*Atheis* の中で、水道局の窓口に給水依頼に来た Hasan と、水道局員 Rusli が、最初は、一人称として *saja* を、二人称として、*tuan* を用いて話しているが、旧知の間柄であることが分ってから、互に *saudara* を二人称として用い、自己に対して *aku* を用いている。前場における *saja-tuan* による会話と、後場における、*aku-saudara* による会話の展開との間には、明らかに心理的姿勢の相違が読みとれ、日本語的な「丁寧体」から「普通体」への変化は、言語上の表現形式としては、現われていないが、使用されている人称代名詞如何が、「丁寧体」「普通体」のムードをつくっていることは、否定できないであろう。Pramoedya Ananta Toer の作品 *Jang hitam - Tjerita dari Blora* の中で、主人が召使に対して、*＜Tidak apa-apa. Pergi kau. Matikan radio itu.＞* という表現を用いているが、同輩間、または、目上のものが目下のものに対して用いる *kau* を使い、命令形において、「丁寧」を現わす接尾辞 *-lah* を欠いていることから、上述の会話の文章において、身分関係を基礎にした主人の召使に対する心理が言語形式を通して反映されているのである。

インドネシア語においては、人称代名詞の一人称、二人称の心理的選択が、文章そのものの意味に段階を与えるとともに、人称代名詞以外の語句の主体的な選択の意志や、接尾辞 *-lah* の取捨が、「尊敬」「丁寧」から「いやしめ」までの意味的段階を示すのである。たとえば、*＜Minta diambil buku itu.＞*, *＜Tolong ambil buku itu.＞*, *＜Tjoba ambil buku itu.＞*, *＜Ambillah buku itu.＞*, *＜Ambil buku itu.＞* の間には、「丁寧」から、厳密な意味における「命令」までの段階がうかがわれるとともに、同じ丁寧形であっても、それぞれの文章の間には、「丁寧」の心理的雰囲気は異っているのである。しかしながら、封建社会からの名残としての広義におけるインドネシア語の敬語法は、その簡略化による民主的言語へ脱皮しつつあることは事実である。例えば、*Hikajat Hang Tuah* の中で見られる *＜Patik memohonkan ampun beribu-ribu ampun dan kurnia duli sjah 'alam.＞* や *＜Ja tuanku sjah 'alam! Patik ini hamba, mana titah, patik djundjung.＞* の如き、事大主義的、形式主義的な表現は、社会的背景の推移によって、抵抗を生

む距離が、明らかにできてきたのであって、今日のインドネシア語においては、全く見られないのである。封建社会から民主的な近代社会への移行とともに行われた言語の民主化によって、このような表現は、もはや、生きた言葉としては、存在しないのである。インドネシア語の民主化にとって、社会の木鐸をもって任ずる同国の新聞が果たした役割は大きい。Armijn Pane は、彼の著書、Perkembangan bahasa Indonesia において、往時、〈mempersembahkan kepada radja〉と表現されていたのが、現在の新聞では、大統領に対して、〈menjerahkan〉あるいは、〈memberikan〉を用い、〈kehadirat〉あるいは、〈kehadapan〉の代りに、〈kepada〉を用いていると述べ、〈kehadirat〉、〈kehadapan〉〈mempersembahkan〉は、封建社会の名残で、民主主義社会の現実に合致しないとしているが、封建時代の王侯と、民主国の元首としての大統領に対する用語を比較するのは、適当でないとしても、新聞が、国民の言語生活に及ぼす影響の大きい点から、形式主義から脱して、民主的な雰囲気を出すことに意を用いていることは、言語の民主化が、民主的社会形成の基礎的前提条件であるだけに、意義のあることと言えるだろう。

しかしながら、その反面、大統領に対する敬称として、Paduka Jang Mulia が用いられているということは、インドネシア語の民主化にとって、一つの悲劇的雰囲気であり、言語における形式主義を助長させる誘因になるのではなかろうか。このような敬称は、明らかに、封建社会の名残であり、その使用が、国民の言語生活、精神生活に及ぼす影響の大きい点で考えさせられる問題であろう。何故なら、上述の如く、インドネシア語には、身分関係を現わす人称代名詞が、心理的に選択されるという、言語の民主化とは逆の方向を辿る要素が備わっているからであり、封建社会の名残としての上述の如き敬称の使用が、現在、あるいは、将来のインドネシア国民の言語生活に重要な投影とならないとは言えないからである。

— 6 —

言語は、論理そのものではない。論理的でないと考えられる文章表現でも、それは、その言語を母国語とする民族の精神の深層・心理的要素を反映するものである。インドネシア語は、西洋語的な論理に欠けている面もあるけれども、インドネシア語には、インドネシア語としての論理があり、他の国語にない長所も備わっている。

語彙体系が整っていることも、その一例であろう。すなわち、〈besar (大きい), kebesaran (偉大), membesar (大きくなる), membesarkan (大きくする), pembesaran (拡大)〉, 〈kerdja (仕事), bekerdja (働く), pekerdja (労働者), pekerdjaan (職業)〉などの例でみる通り、語根の意味から、作成語の意味が、品詞分化機能としての接頭辞、接尾辞の性格を理解すれば、それ

が連想できるという長所がある。

また、心理的特徴として、インドネシア語が、声喩をもつ言語であるということが挙げられる。すなわち、berdentam-dentam（ドンドン鳴る一大砲の音）、mendengung-dengung（ブンブン鳴る）、berdesir-desir（サーサー鳴る一風の音）、bertjiut-tjiut（ヒューヒュー鳴る一風の音）、berdenteng-denting（チンチン鳴る）、berkitjiut-kitjiut（キーキー鳴る一戸がきしる音）、berdengkur-dengkur（グーグー音をたてる一軒の音）、berderak-derak（メリメリ音をたてる）、berdetak-detak（パチパチ音をたてる一タイプを打つ音）などの声喩をもっているということは、インドネシア民族が、鋭敏な即物的感覚をもった心理的、感覚的民族であると言えるし、このような声喩が、インドネシアの文学作品において、多くとり入れられているということは、音調の効果とともに、作家がとらえた主観的真実を普遍的客観的に表現することによって、読者に、より強い印象を与えるのである。

— 7 —

それぞれの国語の間には、文法的な性格や、特定の語彙の量に相違があるため、ある国語で表現できない意味が、他の言語で表現できる場合が少くない。西洋語的な論理からすれば、文法的に正しくない、むしろ、非科学的な言語と言えるかも知れないインドネシア語においても、他の言語にない特徴的な性格がある。インドネシア語における表現上、あるいは、語彙面の特徴をとらえることは、インドネシア語自体の本質的な性格を把握する上で意義のあることだと思う。

インドネシア語の特性として、先ず、下記の例で見られるような、動詞が重複される場合の接頭辞 *me-* の文章リズム上の機能を挙げなければならない。

Burung lajang-lajang *mengepak-ngepak* simpangsiur diudara. (Pramoedya Ananta Toer - Perburuan) (燕が空をまがりくねって羽ばたきしている)

動詞が重複される場合、文法上、動作・行為の繰返しを意味する。これは、言語の表現形式としては、極めて単純であるが、接頭辞 *me-* の機能が、文章リズムの上に投射して、同じ発音の語の繰返しによって生ずる文章そのもののリズムの単調化を救うと同時に、文章に韻律性を与える。すなわち、上例の *mengepak-ngepak* は、それ自体が、リズム感をもっており、また、文章そのものにも韻律美を与えているのであって、たとえ、外国語に翻訳できるとしても、外国語に訳した場合は、その音楽性は失われるであろう。

Sebuah lagu membubung keudara malam jang dingin. Dan suasana jang mati berubah djadi suasana jang *mendesak-desak* dalam dada. (Pramoedya Ananta Toer - Tjerita dari

Blora)

(一つのメロディが、寒い夜空に舞い上る。静かな雰囲気は、胸に迫る雰囲気にかわる)

同じく動詞を重複した例であるが、*mendesak* としないで、*mendesak-desak* と表現しているところに、その韻律的效果とともに、意味の上からも、「ひしひしと胸に迫る」という感じが、明瞭に現われている。

さらに、インドネシア語の特性を現わしている表現として、〈*ber*+語根動詞の重複+*an*〉あるいは、〈語根動詞+*me* (あるいはその変化形)+語根動詞〉をあげることができるであろう。

Diatas tjuma ada bintang jang *berkedip-kedipan*. (Pramoedya Ananta Toer – Tjerita dari Blora)
(空には、またたき合う星があるだけだ)

Di-gunung2 kabut jang tebal *berkedjar-kedjaran*. (S. T. Alisjahbana – Lajar Terkembang)
(山々で濃い霧が追い合っている)

Kilat ber-api2 dan *sabung-menjabung*, petir *sambar-menjambar*. (N.St. Iskandar – Naraka Dunia)
(稲妻が光り、閃き合い、雷がとび交う)

上述の例で示されているように、語の構成上の一定のルールを適用すれば、「互に」を意味する副詞句〈*satu sama lain*〉〈*satu dengan jang lain*〉〈*satu pada jang lain*〉などを用いることなく、なめらかで、リズムカルな、音の効果を意識させる表現となるのである。

語彙面からインドネシア語の特性をみた場合、先に述べたように、語彙の体系が整っていることがあげられるが、語彙の量が他の有力言語と比較して、それほど多くないインドネシア語において、動物が「鳴く」という動詞が、豊かであるのは、上述の声喩と相俟って、インドネシア民族の感覚性を現わすものと言えよう。すなわち、動物が「鳴く」という場合、次の例で見る如く、例えば、日本語と比較しても、はるかに豊富である。

犬が鳴く (*menjalak*)、馬が鳴く (*meringkik*)、牛が鳴く (*melenguh*)、羊が鳴く (*mengembik*)、虎が鳴く (*meraung*)、象が鳴く (*mendering*)、猪が鳴く (*menengok*)、猫が鳴く (*mengiau*)、鳥が鳴く (*berkitjau*)、家鴨が鳴く (*mengakak*)、雄鶏が鳴く (*berkokok*)、雌鶏が鳴く (*berkotek*)、蚊が鳴く (*berdengung*) など。また、*menjalak-njalak* の如く重複すると「吠えたてる」、*berkitjau-kitjau* は、鳥が「鳴きつづける」さまを現わすのである。

インドネシア語の配置法において、屈折が多いということは、インドネシア語には、主観的客観による表現が多いということであるが、インドネシア語が、その言語表現において、主観性が、強調されるのが、一つの特性となっている。これを、時をあらわす表現についてみると、午

前、午後という客観的眞実を表現する語を欠いているインドネシア語において、時の表現が、主観的心理によって処理される。例えば、午前四時は〈pukul empat dinihari (明け方4時)〉、午初二時は、〈pukul dua tengah malam (夜半2時)〉、午後四時半は、〈pukul setengah lima petang (夕方4時半)〉のような表現となって現われるのである。これは、時の表現が、主観的客観によって表現されるということであり、これによっても、インドネシア語そのものが、論理的であるというよりも、多分に心理的、感覚的であると言えるだろう。

む す び

伝統的な経験世界に閉じこもっていたインドネシア民族の言語に、心理・感性を表現する慣用語法が多いことは事実である。しかし、今日、インドネシア語が、論理性を求めて、言語体系に新たな内容を加えて、自己革新を行っていることも事実である。

インドネシア民族が、自己の経験世界から脱皮して、自らの言語に論理性を与えようと努力していることは、閉鎖的停滞社会からの脱皮によるインドネシア社会の近代化を究極の目標にしているためであろう。しかしながら、社会的コミュニケーションの手段としての言語に論理性が求められるのは、当然であるが、一国の言語には、その言語を母国語とする民衆の本質をあらわす言語的心理がある。一般に、言語が、それを母国語とする国民の心理を反映しているように、インドネシア語は、インドネシア民衆の心理に密着したものであり、インドネシア人の心理は、インドネシアの社会・文化に密着したインドネシア語を通してのみ表現できる。したがって、閉鎖的停滞社会から、開放的進歩社会を目指すインドネシアの言語に論理性が求められたとしても、それは、あくまで、皮相的なものであって、インドネシア民族の心理と不可分のインドネシア語の本質、すなわち、マレー語の源泉は、あくまで維持されているのである。以上

主 な 参 考 文 献

- Armijn Pane : Perkembangan Bahasa Indonesia
A.A. Fokker : Pengantar Sintaksis Indonesia
C.A. Mees : Tatabahasa Indonesia
S.T. Alisjahbana Tatabahasa Baru Indonesia

Zuber Usman : Kesusasteraan Baru Indonesia
 小林英夫 : 言語の本質
 波多野完治 : ことばと文章の心理学
 S.T. Alisjahbana : Lajar Berkembang
 Pramoedya Ananta Toer : Tjerita dari Blora
 HAMKA : Tenggelamnya kapal van der Wijck
 // : Didalam lembah kehidupan
 // : Dibawah lindungan Kaabah
 N.St. Iskandar : Naraka Dunia
 // Tjinta dan Kewadajiban
 L.O. Malim : kemudikan
 Armijn Pane : Kisah antara manusia
 A.K. Mihadja : Atheis